

## 紫の上の「継母」物語をめぐって

張 龍 妹\*

### 一、はじめに

「嫉妬」は一夫多妻の古代社会では普遍性のある問題で、また表現の主体が男性側にあったため、男性の視点、感覚から語られることが多い。それにしても、古代日本では、大国主神適妻須勢理毘売や仁徳天皇太后石之日売などの場合を見ると、女性の嫉妬に対して寛容だったと思われる。道綱母も『蜻蛉日記』において町小路女に対する赤裸々な嫉妬を表している。神話や伝説においてはわかりでなく、道綱母が生きていた時代でも、女性の嫉妬に対してはかなり寛容だったと思われる。

### 二、『源氏』までの物語における女性の嫉妬

物語では、『伊勢物語』では歌徳説話的に終わってしまった「筒井筒」の話が、『大和物語』で嫉妬で悶える女性の説話に変身してしまう。しかし、そのような凄まじい女性の苦悩を目にした男性はむしろ女性に共感し、「かくてほかへもさらにいかで、つとるにけり。」と他へも通わなくなり、二人だけの生活に安住することになったという理想的な結末を迎えている。

ところが、『宇津保物語』になると、事情が異なってきた。兼雅があて宮の返事をみて、彼女の人柄を誉め、あて宮と俊蔭娘を等しくもてなせば、人々は却って俊蔭娘が勝っているとうわさするのではないかなどと言うのに対し、俊蔭娘は、

北の方（俊蔭娘）、「げにあらばいかによからむ。まめやかに聞こえたまへかし。ここに、いかでさもものしたまはなむとこそ思へ」。おとど、「一人に馴らひて、それも思ふことあらじや。さもなたまひそ」。北の方、「あやし。などでかさはあらむ。あまたありとも、ありがらにこそあらめ。さあらでもこそありしか。忘れたまはずは、何をか思はむ」。おとど、「それはさらなりや。思ひ出づればいとみじや」とて、涙を落としてかくのたまふ。「春日詣」などと下線部のように大らかに答えている。この対話は『大和物語』と比べると、いかにも男性中心的で、また俊蔭娘の発言は、古代日本の女性ではなく、儒教的に熏陶された感さえある。

### 三、紫の上の嫉妬と「継母」

「雨夜品定」では以下の下線部のように、男性の浮気に対する女性の心構えとして左馬頭が語っている部分がある。

すべて、よろづのことなだらかに、怨ずべきことをば見知れるさまにほのめかし、怨むべからむふしをも憎からずかすめなさば、それにつけてあはれもまさりぬべし。多くは、わが心も見る人からをさまりもすべし。あまりむげにうちゆるべ見放ちたるも、心やすくうたきやうなれど、おのづから軽き方にぞおぼえはべるかし。繫がぬ舟の泛きたる例もげにあやなし。

まったく男性の立場から女性に出された一方的な注文といえる。これは先にみた『宇津保物語』

\*北京外国語大学教授

兼雅の独りよがりの発言と俊蔭娘の対応と本質的に一致するものであると思われる。

そして、光源氏と紫上の関係においても、紫上の嫉妬だけが常に光源氏の悩みの種であった。

ところが、嫉妬だけが難点である紫上は、明石姫君を引き取ることで、変貌していく。「めざましと思さずはひき結ひたまへかし」（松風）と光源氏から、姫君の腰結役を依頼されると、紫上は彼の心隔てに恨みを覚えるものの、明石姫君の可愛らしさを想像し、微笑を浮かべてしまう。この短い一節の中に、実は紫の上は嫉妬する女性から継娘を愛育する理想的な継母に変貌しているのである。物語は紫の上のこの変貌を「児をわりなうらうたきものにしたまふ御心なれば、得て抱きかじつばやと思す」（松風）と簡単に結論づけている。そして、姫君の可愛らしさに明石君への嫉妬心が緩んだばかりでなく、さらに、「いかに思ひおこすらむ、我にていみじう恋しかりぬべきさまをとうちまもりつつ、ふところに入れて、うつくしげなる御乳をくくめたまひつつ戯れるたまへる御さま、見どころ多かり」（松風）などと、実母明石君の心境まで推測を及んでいる。そのため、光源氏の明石君訪問を寛容にみるようになる。

嫉妬だけが難点である紫上が、明石姫君を引き取ることで、継娘を愛育する理想的な継母に変貌する、そのことにどのような必然性が見出せるのであろうか。

思い出されるのは『後漢書』にみえる、漢光武十七年、光武帝自身が書き綴った皇后郭氏を廃する詔書である。

（光武）十七（41）年、廃皇后郭氏而立貴人。制詔三公曰：「皇后懷執怨懟、數違教令、不能撫循它子、訓長異室。宮闈之内、若見鷹鷂。既無閑睦之德、而有呂霍之風、豈可託以幼孤、恭承明祀。今遣大司徒涉、宗正吉持節、其皇后璽綬。

『後漢書』皇后紀 中華書局

ここで郭皇后の悪徳を挙げているが、結局は嫉

妬することと、継母として他腹の皇子を養育できないことの二点に尽きるのである。皇后は皇帝の正妻にあたり、他出の皇子にとって嫡母に当たるため、他出の皇子をわが子として養育し、教育する責任があるが、嫉妬はそのような責任と相容れない感情であることは明らかである。「松風」巻に光源氏が紫上に明石姫君を引き取らせたことは、彼女を明石姫君の嫡母として、したがって光源氏の正妻として扱うことを意味する。そして、それによって彼女が理想的な継母となり、嫉妬も和らいだことは、儒教的な女徳を備えた女性として造形されていると読み取れるのである。

しかし、このような理想的な紫上像が朝顔の姫君の出現によってまた崩れてしまう。その一件は杞憂に終わったものの、さらに身分の高い女三宮が六条院に降嫁してきた。紫上にとって、それは嫉妬すればするほどわが身の惨めさを露呈するような重大事件である。そのうえ、紫上と女三宮との板挟みから逃れるかのようにして、光源氏は朧月夜との関係を復活させてしまう。そのような状況のなかで、紫上はいよいよ孤立無援の思いをかみしめるようになる。

朧月夜との再会を告白する光源氏に対し、紫の上は「中空なる身のためくるしく」と、ただわが身の不安を訴えている。しかし、さすがに苦しさのためこぼれてくる涙に光源氏も動揺し、「ただおいらかにひきつみなどして教えたまへ」（若菜上）などと、むしろ紫上の素直な嫉妬を求めるようになっている。男性の立場からつねに紫上の嫉妬だけを難点としていた光源氏が、かえって彼女に嫉妬するように求めていることは、男性から女性に心隔てのない関係を求めていることになり、「雨夜品定」に語られる男性一方的な嫉妬論とは異質なものである。ここで、二人の間によく対等な夫婦関係が成立したように思われる。如何なる場合でも嫉妬は許されぬという中国的な女徳の束縛からは想像もできないような成り行きである。

それから、理想的な継母としての存在も「若菜下」では否定されていく。住吉明神への願果たしの後に、紫の上の寂寥がこのように語られている。

対の上、かく年月にそへて方々にまさりたまふ御おぼえに、わが身はただ一ところの御もてなしに人には劣らねど、あまり年つもりなば、その御心ばへもつひにおとろへなん、さらむ世を見はてぬさきに心と背きにしがな、とたゆみなく思しわたれど、さかしきやうにや思さむとつづまれて、はかばかしくもえ聞こえたまはず。 「若菜下」

「方々」とは女三宮と明石君を指している。明石君の方は、冷泉帝の退位によって東宮が即位し、明石女御腹の第一皇子が東宮に立てられた。いずれ国母になる娘と、即位が約束されている外孫を有する明石君の存在の重さは想像にあまるものである。それに対応するかのよう、女三宮は即位したばかりの今上の意向で二品に叙せられ、社会的な格式がいよいよ高まった。そのような二方の存在に対し、紫の上は「わが身はただ一ところの御もてなし」とあるように、自分は光源氏の愛情しか頼るものがないと孤独を洩らしている。

明石姫君の入内は「藤裏葉」巻に語られるが、姫君に付き添って参内した紫上が退出する際には、「出でたまふ儀式のいとことよそほしく、御輦車などゆるされたまひて、女御の御ありさまにことならぬ」というほどの盛況であったが、すでに指摘されているように<sup>1</sup>、当時入内する女子の母親が叙位されることが多かったにもかかわらず、紫上の叙位が語られていないことの意味は大きいと思われる。中国では、明代まで服喪は嫡母三年、生母一年となっていた。明になってようやく生母も三年になったものの、清の『紅樓夢』では正妻以外に生まれた子供は、生母を「姨娘」と呼び、母と呼ぶことさえ許されない事情が窺える。ところが、日本の養老令儀制五等親条では、「父母、養父母、夫、子」を一等とし、「祖父母、嫡母、継母……」などを二等としている<sup>2</sup>。藤原道隆娘定子が立后<sup>3</sup>の際に、道長娘彰子が入内<sup>4</sup>の際

に、それぞれの母親が正三位に叙されていることを考えると、そのような時の叙位はやはり生母に限るのではないかと思われる。明石女御の入内の際し、紫上に「御輦車」の宣旨という一時だけの栄華はあったものの、叙位がないことは、実体としての社会的地位が保証されていないことを意味する<sup>5</sup>。それに女三宮降嫁によって、彼女は光源氏の正妻でもなくなってしまったのである。

前引の紫上の内心語に、明石女御の養育した自負も彼女との連帯感も見出せない。そのように改めて孤独をかみ締めているのは、上述のような確固とした社会的保証のないわが身の上を反芻しているからであろう。それで、年が積もるにつれて光源氏の愛情も衰えてしまうだろうから、そうとしない先に出家を考えるようになる。

これは、将来の夢を託した皇子に先立たれ、妻として母としての位置に不安を覚え出家の意識が芽生えるようになった『とはずがたり』の作者後深草二条の心境と近似している。孤立無援で出家を求めようとする紫上の内面、このこと自体、それまで築いてきた理想的な継母としての紫上像の否定であると考えられる。

#### 四、文学の担い手の問題

中国では、嫡母として、継母として栄華を極めた女性の例は数多く存在する。日本では、制度自体異なっているが、光源氏の栄華を担う明石女御を養育し、その明石女御も自分をまことの親としてもてなしてくれるものの、そのような栄華を享受できない紫上の内面描写は、女性の作者だからこそ可能だったのではないであろうか。

#### 注

1 宮川葉子「紫上試論——紫上の社会的・経済的独立をめぐる」『中古文学』1992年11月/胡潔「紫の上が明石姫君の養母になる意味」『平安貴族の婚姻習慣と源氏物語』風間書房 2001年

2 『令義解』国史大系12 経済雑誌社

- 3 永祚二年（990）一月十五日に入内、二月一日に女御となり、十月五日に中宮となる。母親高階貴子は同年十月二六日に叙位。『日本紀略』永祚二年二月十一日条、『権記』長保二年四月七日条
- 4 長保元年十一月入内、母親の源倫子が正三位に叙位。『御堂関白記』長保元年十一月三日条
- 5 コンソーシアムの席上、藤原頼通の養女姫子入内の際に、隆姫が叙位した例を、古瀬奈津子先生及びその学生の東海林亜矢子氏から教わった。姫子は頼通とは血縁関係もなく、頼通夫婦はその養父母にあたり、一等親であると考えられる。しかし、現在の日本では、嫡母、継母、養母、庶母をすべて「継母」としている。